

第8分科会

羽島市立羽島中学校



所在地 〒501-6207 羽島市足近町7丁目455番地
校長 今井田 康雄
生徒数 827名(26学級)
連絡先 TEL 058-392-4433 FAX 058-391-8975
E-mail hashimaj@hashima-gifu.ed.jp
URL <http://www.hashima-gifu.ed.jp/~hashimaj>

【研究主題】

できた喜びを味わい、
自ら運動に親しむ力を育む体育学習



1 研究の概要

(1) 研究主題

今日では科学技術の高度化、情報化等の発展により、人間関係が希薄となり、精神的なストレスが増大している。また、日常生活において体を動かす機会が減少し、体力が低下するなどの心身両面にわたる健康上の問題が顕在化してきている。その中で生涯にわたって主体的に運動に取り組んでいくために、学校体育では、生徒たちの運動技能を向上させるとともに、思考力や判断力を身に付けさせながら、「できた」喜びを多く味わわせることが非常に重要であると考ええる。

生徒が生涯にわたって自ら運動に取り組む資質や能力を身に付けるためには、「できた」喜びを味わわせながら、主体的に運動に取り組むことができる生徒を育てることが大切であると考ええる。

主体的に運動に取り組む生徒とは、課題をもち、技術ポイントを意識して練習しながら運動技能の向上を実感し、次に目指す姿を明らかにして課題をつくるという学習過程を繰り返すことによって、その運動が有する特性や魅力を理解し、楽しさを味わいながら運動に取り組んでいくことができる生徒であると考ええる。したがって、授業において、どのように運動技能が高まっていくのかを明確に示す場面を設定し、効果的な練習方法や練習の回数などを全体指導や「学習の手引き」の活用を通して指導していく。併せて、生徒に単元の仕組みや技術ポイントを理解させ、その技術ポイントを意識しながら練習を繰り返すことを通して、効果的に運動技能を身に付けるとともに、思考力や判断力を身に付けることができるよう指導する必要があると考ええる。

(2) 研究仮説

単元の仕組みや技術ポイントを明らかにした指導を行うことを通して、生徒は、効果的に運動技能を身に付けながら思考力や判断力を身に付け、できた喜びを味わうことができ、自ら運動に親しむ資質や能力を身に付けることができる。

(3) 研究内容

①運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成

ア 運動の様相と対人技能における構造的な指導過程〈柔道〉

イ 生徒の発達段階を踏まえた指導計画〈体づくり運動〉

②技能向上に結びつく思考力・判断力を高める工夫

ア 生徒の運動技能向上のための「学習の手引き」の活用

2 公開授業

(1) 第1学年 体づくり運動

授業者：吉田 潤司 教諭

体づくり運動では、実生活に生かすことによって運動の楽しさを味わったり、目的に応じた運動を工



夫したりするような生徒を増やそうと考えて単元を仕組んだ。

1年生では、まずは体力を高める方法や自己の体力を「知る」ことをスタートとして、単元の前半に様々な運動を紹介した。前時である5時間目に計画をたて、本時は「実際にやってみて、修正する」というという授業を仕組んだ。

本時の評価としては、思考・判断が評価基準になっている。課題に応じた運動の取り組み方が工夫できるというところをねらいとした。

そのための手立てとして、一つ目は、集団学習を大切にした。岐阜県では運動／集団学習で、グループでの活動を大事にしている。今日の活動では、リーダーやMOが中心となって運動の組み合わせ方を工夫したり、強度を考えたりするような子供の姿を目指してこれまで指導してきた。もう一つは、本時の振り返りの仕方の工夫である。前時で立てた計画を最後に赤ペンで直すという作業をした。それによって「いい方法を見つけたな」とか「こういう強度が、自分には合っているな」など生徒が発見できることが大切と考え指導をした。その結果、たくさんアイデアが生まれ、私自身が驚くような工夫や発見があり、楽しい授業になった。

(2) 第2学年 武道 (柔道)

授業者 : 杉山 正高 教諭

柔道における思考・判断のとらえとしては、まずは教えるべき内容をしっかりと教えるが、習得した技を活用しながら自由練習や約束練習をした時に、つまずきが生じることが多い。そこで、つまずきが生じた場合に、「どうしたら相手を合理的に投げることができるのか」を生徒たちが工夫することととらえた。柔道は小学校からの経験や日常生活からは縁遠い競技である。そこで、十分な経験が無い中で思考力や判断力を高めることは容易ではない。



そこで、つまずきが生じた場合にどうしたら上手くできるようになるのかを、手引きやVTR、仲間からのアドバイスという拠り所となるものを使って子供達が仲間と共に思考を巡らせながら学習していけるようにしてきた。

授業の導入では、懂れや技の習得のポイントを明確に示すことがで、生徒たちの関心・意欲を高めることができた。しかし、「どうして体落としの後にすぐに体落としをかけるか？」という本時の授業の目的に即した投げかけを行うと、さらに思考力・判断力を高めながら意欲的に授業に取り組む流れになったのではないかと考える。

単元指導計画または単位時間の指導過程については、対人技能の「投げよう→投げられまい→投げた」という実感をもたせるための単元の仕組みは生徒の意識と実態に即したものに作り上げることができた。1時間の指導過程においては、本時は「止まった状態→動きながら→ランダムに動く」自由練習という具合に流していったが、どの生徒たちにとってもその流れで本当の力をつけることができたかどうかは疑問が残る。そこで、今後は個に応じた練習の流れを工夫していきたい。

評価規については、約束練習の時にできるということとしたが、生徒たちの技能の習得レベルや実態から「自由練習で使えるか」に変更した。

3 研究協議

- (1) 提案 司会者 : 吉田 英治 教頭 (岐阜県中学校体育研究会)
 発表者 : 安藤 宏 教諭 (岐阜県中学校体育研究会)

<本校の主張・提案>

- ①運動の本質に基づく教材分析と系統性を重視した指導計画の作成
- ア 運動の様相と対人技能における構造的な指導過程 (柔道)
- イ 生徒の発達の段階を踏まえた指導計画 (体づくり運動) 技能の向上に結びつく思考力・判断力を高める工夫
- ②技能向上に結びつく思考力・判断力を高める工夫
- ア 生徒の運動技能向上のための「学習の手引き」の活用



(2) 協議内容 (□…質問・意見・感想)

※ 回答は、授業者 (吉田教諭, 杉山教諭) 及び発表者 (安藤教諭)

- 今の3年生が1年生の時と比べて、体づくりに取り組んできた結果、新体力テストで克服・改善された結果は見られたのか。また、文化系の部活動では、運動部の先輩の動きを見習って体力が向上することがあったか。
- 体力を高める運動の前に体ほぐしの運動があったが、他の種目でも主運動につながるウォーミングアップを工夫されているのか。
- A 今の3年生は1年生時、2年生時と今の1年生のようにまず内容を知って取り組むということを行ってきている。先ほどの研究発表にあるように、部活動の練習に取り入れるなど行ってきた。具体的に伸びを数値で示すことはできないが、県の平均を上回るようになってきている。
- A 文化系部活動所属の生徒のことに限らず、「自分から進んで取り組むこと」はやはり難しいと思うが、学校の行事として生徒会がレクリエーションを企画したり、体育の中で今までよりも楽しく動いたりする姿が見られるなどの様子から、少しずつ成果が出ていると考えている。
- A 主運動につながるということに関して、授業前の開始の準備運動だとかはその種目に応じて、前の時間に行ったことをしたり、全体の動きの中から部分を取り出して繰り返し行ったり、それぞれの種目に合わせて行っている。
- 別冊子の9ページにあるグループトレーニング計画というのがあるが、「5分の運動を5種目」というのにグループ毎に何かテーマというのはあるのか。それぞれの目標がある中で集団の中でそれを行おうとすると、集団の中で課題があったりとか個人でどうしてもやりたい課題があったりとか、それをいかに調整していくか。
- 動きを持続させるための運動は、どこで取り組まれているのか。
- A グループはすべて異質なグループとして、計画を立てる際に、一人一人が高めたい体力とその理由 (根拠) を考えさせた上で、交流をする。本時の1時間の中で「グループ

内の個々の希望が一つは入る」ように計画を立てさせ、1年生という段階では、いろいろな動きを知る方が大切だと考えた結果、全員に経験させてみようとした。その中で、本当に効果のある動きを考えてくことを大切にして授業を仕組んだ。

- A 動きを持続する運動については、年間のカリキュラムの持久走において、間をおく形となるが実施する。
- 柔道の準備運動での回転運動や受け身をどのようにして選択したのか。また、3年間で扱う技は「低い位置からの技」とあるが、詳しく聞きたい。
- A 準備運動では、一般的には、「器械運動の後に柔道の単元を仕組むとよい」と言われており、器械運動と連動するものが多いため、前転・後転・開脚前転等、関節を伸ばしたり、前後に倒れる感覚をつかませたりする準備運動に取り入れた。受け身については、右手組がとれるよう左手で受け身がしっかり取れるように、低い位置から高い位置となるように、座った状態、蹲踞、そして立位からとなるようにしている。扱う技については、1年生の時には大内刈り・出足払いを行い、固め技を十分にやらせたい。立ち技については限られてくるが、足の動きや倒れたときの衝撃の少ない技を選択した。簡単に受け身が取れるものから、だんだんと難しい技を施して投げるといふことの難易度や生徒の体力的負荷などの面に考慮して扱う技について検討した。
- 学習カードにMOとPOという役割分担がされているが、これは他の学校でも取り組まれている岐阜県独自のものか。また、どのようにリーダーを選出し、評価をどのようにしているのか。
- A POとはパフォーマンスオブザーバー、MOとはメンテナンスオブザーバーという役割で、岐阜県では役割として位置付けている。パフォーマンスという面でいえば技能の面で観察をしたり、助言をしたりする役割になっている。一方、MOというのは、態度面やきまりの守り具合といった視点で観察をしたり、助言をしたりする役割を果たしている。いずれもリーダーを中心に指示を出したり、練習の方法を決めたりするが、その助言者として位置付けている。守り具合の評価については、POカードやMOカードを用いて5段階で評価したり、言葉で評価したりしている。
- 2年生14時間の計画の中で3・4時間目に投げ技が入ってきているが、1年生での指導では、どのように指導されるのか、また外部団体との連携がどうなっているのか。
- A 投げ技が1年生から入っていることに関して、細かい安全面に配慮して手引きを参考にしたり、教師が示範を見せたり、柔道部員に示範させたりしてイメージをもたせている。実際にやらせてみて、理にかなった逃げ方であったり、かけ方であったりとかというのを教え、後に反復練習で行うこととしている。そうした柔道の醍醐味を適切に味わわせるためにも、特に大事なのは頭を打たない受け身を1年生時では擬音を使い、例えでの話で分かりやすく、受け身ができるよう指導の充実を図っているところである。
- A 岐阜県で柔道を選択している中学校は少ない。その中の5つが羽島市であり、当市では市教委主催で研修を行い、教師が指導力を付けている。他の市町でも柔道連盟や県の柔道講習会などが開かれている。社会人の指導者に関して、連盟に依頼し、指導していただいている他市も実際にある。

□ 約束練習の中で投げる姿、受ける姿がすばらしかった。しかし、自由練習になるとその姿が崩れ、これからの課題かなと感じた。

A 特に自由練習では、学年によって必要かつ安全な受け身というのが保健体育科の学習指導要領にも示されている。その形がどんな場面でも取れるように、生徒たちの実態を見て「習得のために実際に必要な指導は何か」を精選している。

□ 生徒たちが落ち着いているだけでなく、生徒のあの姿が見られるのは生徒の中に、先生の指示・指導を聞いて学習に取り組めば、また、仲間と共に練習に取り組めば楽しさを感じ、できるようになった喜びを感じられることを実感しているからこそ集中して取り組めたと感じる。安全面の配慮は、柔道に限ったことではないので、体育の専門として自信をもって堂々と指導に当たりたい。

(3) 指導講評 指導助言 : 名古屋市教育センター所長 伊藤 久仁 先生
【振り返りの重要性について】

まず、教師と生徒との関係がよく、生徒が学ぶ集団になっていることがすばらしい。全国学力・学習状況調査で数年間全国一の秋田県の小学校の授業をテレビで観たことがある。学習の振り返りが見事であった。目標をみんなが分かっていたら振り返ることができない。以前授業を拝見し、この振り返りを充実させたらもっとよくなるという話をしたが、今日は前よりも格段によくなっている。

【教育改革の振り返りの中での体育について】

戦後の教育全体の動きを考えたとき、態度重視と知識重視が振り返りのように行ったり来たりしている。これは、清水宏吉氏の「学力を育てる」から引用した。体育も多分にその影響を受けて進んできた。

昭和26年の指導要領では、教育の生活化といわれ、態度重視の教育がなされてきたが、高度成長期の昭和30年には、何年生で何を教えるかなど系統化がなされ、科学化・系統化が始まり、知識重視の傾向が強まった。偏差値教育や「運動好きの体育嫌い」を生んだなどの批判も受けた。

昭和52年には、人間化・個性化といわれ自己教育力や個性化が重要視され、「ゆとり教育」というキーワードで表された。体育では、楽しい体育が展開され態度重視に振り戻された。平成10年は、総合化といわれ、それまでの傾向がさらに強まった。

そして20年告示の学習指導要領では、学力低下の批判に答えるべく知識重視に向かったと考えられている。

平成16年からの中教審専門部会の会議では、子供たちにどのような力を保証してきたのかが問われた。20年告示の学習指導要領では、学習内容をより明確にする必要があると考えられた。

ただ、単に知識や技能が身に付くようにするのではなく、知識・技能に「思考」を介在させることが重要である。つまり「わかる」と「できる」の間に「思考」させる授業展開を工夫することが大切である。



【学習内容の明確化について】

柔道の学習内容つまり、学ばせる内容は何か、を考えたとき、専門家はついつい技の形を教えるが、なぜそういう動きをする必要があるのか、ということを学習内容として学ばせる必要がある。そのような学習を実現するために発問の研究が必要である。

体づくり運動では、「活動あって学びなし」と言われることがあるが、教師側の発問レベルを上げていくことによって学習内容に迫る発言を子どもから引き出すことができる。

4 成果と課題

(1) 成果

- 柔道では、運動の様相と対人技能における構造的な指導過程をもって指導に当たったことにより、生徒が技術ポイントを理解して練習に取り組むことができた。また、自ら次の段階の運動技能を身に付けるために、新たな技術ポイントを考えたり、意識したりして学習に取り組むことができた。
- 体づくり運動では、3年間を見通した指導計画を立てることで、生徒に「自分はどんな運動が必要で、どのように運動に取り組んでいくとよいか」を系統的に考えさせることができた。2年生での学習を生かして部活動の練習に取り入れる姿もあり、自ら運動に親しむ力の高まりの一端を見ることができた。
- 学習の手引きの活用を通して、生徒自身が自分のつまずきを解消するために、選択したり、考えたりした技術ポイントを意識して繰り返し練習することによってできた喜びを味わうことができた。

(2) 課題

- 動きや意欲の面では高まりを実感させることができたが、誰にも明白な得点や、技能の高まりの段階などで評価できるようにしていくと、さらに充実感をもって運動に取り組めると考える。
- 思考力・判断力の高まりをとらえるために、生徒の意識や活動の変容を追跡調査し、よりよい指導を模索していく必要がある。
- 「思考」を介在させるために発問の研究を行い、学習内容をより明確にした指導を行うことができる。